大分精神障害者就労推進ネットワーク　会報

ささえあう

２００９年
8月２５日
第１０号

事務局　大分市大字森679-6　リフォーム夢舎内　TEL･FAX097-527-5443

ネットワーク4年目に

地域の理解を求めて、さらに一歩を

大分精神障害者就労推進ネットワーク 代表　　藤波志郎

広がる“理解の輪”

ネットワークが発足して４年目に入りました。皆様のご協力に心から感謝いたします。

これまでの３年間、私たちはさまざまな取り組みを行ってきました。県外の先進地から講師を招くなど研修を重ね、「精神障がい者は働ける」こと、そして働くためには「適切な支援が必要」であることを実感し、実際に地域のいろんな仕事を探して引き受け、企業とのつながりをつくり、試行錯誤しながら取り組みを広げてきました。また、地域の様々な情報を集め、「大分で生きる 大分で働く」という就労と生活を支援するためのマニュアルも作成しました。

そのなかで痛感したことは、適切な支援を実現するためには「地域的なネットワーク」づくりと地域の人びとの理解を広げていくことが何より大切だということでした。

地域に新たな可能性

そして、３年目の昨年度は、三つの地域で「就労を考える地域フォーラム」を開催することができました。

今年１月に開いた大分市のフォーラムでは、「働くことで自信を持てるようになった」「人の役に立てることがうれしい」という多くの働く当事者の声を直接聞くことができました。

２月の別府市のフォーラムでは、支援センターや医療機関、企業で支援に関わる方々の、熱意と情報、そして率直なご意見を伺うことができました。

そして、竹田市のフォーラムでは、長い間、精神障がい者に寄りそって支援を続けてこられた方々のご苦労と、これからより積極的に取り組んでいきたいという行政の思いがつながり、新たな可能性を作り上げていく姿を見ることができました。

３会場とも、予想を上回る多くのご参加をいただき、地域の理解を深める上でも大きな役割を果たすことができたものと考えています。

「働く喜び」持てる地域に

地域の取り組みの状況はそれぞれ異なっています。しかし、私たちは精神障がい者が地域と関わること、そして人のために役立つ仕事をすることの重要性は、どの地域でも変わらないことを確信しました。また、支援する人たちの熱意とともに、支援方法を確立していく必要性も強く感じました。そのためにはネットワークをさらに広げていくことが不可欠だと考えています。

今年度も、力を合わせて暮らしよい地域づくりを進めましょう。

報告－第４回総会･記念シンポジウム

６月１３日に別府大学メディア教育･研究センターで第４回総会及び記念シンポジウムを開催しました。１００名に近いご参加をいただき熱心な意見交換が行われました。

「ここまでよくがんばってくれたと思います。地域に広げてくれたことはとてもいいことで、他地区でも開いていただくと、地域の認識が変わってくるし、企業の皆さんにもわかっていただけるのではないかと思います。ぜひ実現してください」という会場からの声が、これまでの取り組みの意義と、今後の方向性を示していたように思います。以下、報告を掲載します。

●基調講演　「ネットワークが広げた可能性」

三城　大介・別府大学文学部人間関係学科准教授

“溝”を埋めるために

今日この会場に私の師がいまして、非常にしゃべりづらいのですが(笑)、なぜ緊張するのかというと恐いからです。何が恐いのかというと、自分に中身がないことと、それにもかかわらず皆さんに「こうしましょう」話しかけることを見られるのが恐いんです。心の病を持った人たちが地域に出て働き出すときに、自分というものをさらけ出すことが難しい。なぜ難しいのかというと、それは自分が心の病を持っていて他の人と違うんではないか、それを知られるといやだ、そんな思いがあるように思います。

実際には心の病に理解がある環境かも知れない、そうではないかも知れない。そこがよくわからないから臆病になってしまう。またまわりの人たちも、心の病に知識がないと理解できない。するといつまで経っても溝が埋まらないということになります。お互いの思いや状況が理解できれば、「ああ、そうだったのか」となります。ということで、私も最初の緊張感や怖さを克服して本論に入りたいと思います。

現場からネットワークまで15年

ネットワークをスタートして４年目に入りました。うれしい限りです。最初は「そんなネットワークをつくっても一年持たないんじゃないか」というご意見もいただきました。私たちも「きっとそう思うだろうな」と思いながら、だからこそやらなければという気持で一年､一年､積み上げてきました。

もう少し前の話になりますが、私は八年前にはまだ現場にいて、心の病を持っている人たちの地域生活移行とか就労支援に取り組んでいました。精神保健福祉法が成立する頃、大体一五年前位に取り組み始めたんですけれども、そのとき私は認知行動療法をやってたものですから、スモールステップププログラムといって、心の病を持っている人たちが少しずつ、小さな階段を一つ一つ上がっていくような形で地域生活への移行だとか、就労支援のプログラムを作っていけばとてもスムーズにやっていけるようになるのではないか、また途中で躓いた場合にもゼロに戻るのではなく、１回休んで再スタートできるのではないか、そういうプログラムを作って実践していたんです。ところがうまくいかない。プログラム自体はうまくできている。当事者もすごく努力して、だんだん適応してくれる。ところが、それを進めるために足りないものがあったんです。

難しかった「地域の連携」

私は日出でやってたんですが、商工会の事業主、行政、地域にお願いして、そして家族にも当事者にもいろんな話を全部自分でしていきながら、就労移行していって、それがうまくいったら事業所にフォローアップしていって、私の体一つじゃとても足りなかったんですね。数が増えれば増えるほど、自分の首が絞まってどうにもならなくなるということになったんです。

藤波代表とはその頃からのつきあいでして、共同で精神障がい者のグループホームはできないかというようなことを模索して、女性のグループホームをつくるなど、１５年間一緒に活動してきています。その当時の難しさというのがありました。何が難しかったのか、それは地域の連携がなかった、みんなで取り組んでいこうという環境がなかったんです。

その当時、アメリカで実施されていたＡＣＴモデル、ＩＰＳモデルというものが日本に入り始めた頃でした。ＡＣＴモデルは、地域のなかで心の病を持った人たちを積極的に治療していきましょう、地域のなかで生活できるようにしていきましょうという取り組みです。ＩＰＳモデルは、精神障がい者一人ひとりにあったプログラムを作って、一人ひとりサポートしていきましょうというものです。私はそのやり方が有効だと考え、やってみようとしました。ところが、一人の人がうまく行きかけると他の人に関わる時間がなくなるというのが当時の現実でした。

「出会い」から進み始めた

一人の力は本当に小さい。それから地域のなかで連携ができないまま、いろんな機関の人がいろんな地域の人たちと結びついていくことがないと、地域のなかで心の病がある人たちを支えていくのは本当にむずかしいんだなということを、私は身をもって痛感したわけなんですね。

どんなにいいモデルを持ってきても、日本ではみんなで連携して調整していく面が弱いために、なかなか定着しない。そういう問題点を抱えていて、何とかしなければいけないと思っていたときに、今のネットワークの人たちと出会いました。まず実態の調査をしよう、他県の進んだ例を調べてみよう、大分にあった取り組みモデルをつくりたい－取り組みは一歩一歩進みはじめました。

ネットワークには、行政の人も当事者･家族も医療関係者も保健福祉関係者も企業関係者も、みんな入ってもらって、みんな同じテーブルについて、大分県のなかで当事者がどうやれば安心して気持ちよく生きていけるのかみんなで話し合おうという形ができました。そして三年経ったんですね。

新たな可能性向けて

昨年度は３地区でフォーラムを開くことができました。私はいずれもコーディネーターをさせていただきましたが、そのなかで感じたことは、地域にはそれぞれの地域特有の問題があるということです。しかし、その問題を分析していくとどの地域にも共通する問題が根底にあります。それをどのように切り結んでいったら今後の問題解決につながっていくのかと考えていくことが、今日のシンポジウムのテーマの一つになると思います。

今から３名のパネリストと１名の報告者と一緒に、３地区のフォーラムの報告を受けながら、これまでの成果をどう受けとめるのか、そしてこれからどういう方向で取り組みを展開していけばいいのかを話し合っていきたいと思います。そのなかで新たな可能性が見えてくるのではないかと思っています。

●シンポジウム「当事者・地域・ネットワーク」

シンポジスト　　　白石　一徳氏　大分フォーラム事務局長・フライハイム
　　　　　　　　　青柳　智夫氏　別府フォーラム事務局・大分障害者職業センター所長
　　　　　　　　　古賀　朋和氏　大分丘の上病院デイケア
報告者　　　　　　立川　房江氏　竹田市　やまなみ･竹田フォーラム
コーディネーター　三城　大介・別府大学文学部人間関係学科准教授

三城大介（別府大学）それではシンポジウムに入りたいと思います。まず大分フォーラムの報告を白石さんにお願いします。

当事者の声を中心に―大分フォーラム

白石一徳（フライハイム・精神保健福祉士）大分市のフォーラムの事務局長をさせていただきました。今年（2009年）の１月３１日に大分市のアイネスで「精神障がい者の地域生活と就労を考える大分フォーラム」として多くの団体の後援をいただいて開催しました。昨年の９月に実行委員会を立ち上げて、４回の実行委員会を開いています。実行委員会の前後に事務局会議も行いました。

フォーラムは基調提案、報告、シンポジウムという形で行いました。一番力を入れたところは報告で、当事者の声をどうやって皆さんにお伝えしたらいいのかと考え、四つの事業所をまわって事前に当事者との打ち合わせも行いました。テーマは「私の仕事･私の地域」で、地域の人たちとふれ合い、喜ばれることによって自信がつき、回復や就労につながっていくことが当事者から話されました。

シンポジウムは｢ネットワークによる支援へ｣をテーマに行われ、各シンポジストからは、①当事者は「まじめで人の役に立ちたいという気持ちが非常に強い」、②地域で人の役に立つことが自信を取り戻し、生活への意欲を回復させる③介護の仕事への就労が広がっているが、支援の重要性も高まっている④「精神障がい者は働ける」が、安定して働くためには、会社も地域も医療機関も､あらゆるところが変わっていくことが必要だ、という声が出されました。そのためには、精神障がい者と｢普通に｣接する、「一人ひとり」に向き合う、そして連携を取り合って努力を一つに集めることが必要だと指摘されました。

私たちのこれからの方向として、①精神障がいに対する理解を地域や企業などに広げていく②“普通に”支援していける方法を確立する③協力のネットワークを広げる―ということが見えてきたシンポジウムだったと思います。

三城　大分市内は今報告にもありましたが、先進的な取り組みが行われています。大分フォーラムでは、それを市民により広く伝え、当事者への理解を深めてもらうとともに地域づくりに結びつけていくことなどが話し合われました。次に青柳さんに別府フォーラムの報告をお願いします。

就労の具体例学ぶ―別府フォーラム

青柳智夫（大分障害者職業センター所長）障害者職業センターでは、職業評価に基づいて職業リハビリテーション計画というのを立てまして、ワークトレーニングという職業訓練を行って就職をめざしていただく取り組み、それから仕事に慣れるまでの数ヶ月間、職場に出かけてジョブコーチ支援を行ったり、うつ病などで職場をお休みされた方のリワーク事業などを行っています。フォーラムは情報提供の一環として取り組みました。センターとこのネットワークと別府市の自立支援協議会の就労部会が三位一体でやりましょうということで６か月位の準備

で実施しました。内容としては、三菱商事太陽の山下部長の「企業として精神障がい者を雇用する条件」について、社内の研修で正しい理解を持つ事、そして社内ジョブコーチなど支援者を配置することによって、職場不適応は仕事ができないか対人関係に問題があり、両方が相まって、仕事に行きたくない、あるいは離職してしまうということになるんですが、そうならないように社内の体制をつくっていく。それから、現状を報告する担当者会議、勤務時間を短い時間から段階的に延ばす、それで複数の精神障がい者を雇用しているというお話がありました。ただ企業の努力だけでなく、生活訓練施設や病院の方からも、金銭管理や共同生活における思いやりの心をはぐくむトレーニング、心理教育などが必要だよという指摘もいただきました。また西山課長から、ＩＰＳに似たような一人ひとりに応じたトレーニングの重要性が報告されました。企業の社長さんからは「明日は我が身なんだから、きちっと雇っていこうよ」というお話があり、当事者の方から感銘を受けたという感想をいただきました。また「働く意欲の大切さがわかりよかった」という当事者の声もありました。病院における心理教育プログラムの重要性も指摘する声も出されました。

福岡の就業支援センターの報告もいただいたのですが、ジョブコーチが１０数名、コーディネーターが数名いて、２０名位のスタッフで福岡市内のいろんな会社を開拓しているというお話でしたが、その後、職場開拓を専門にするスタッフが新たに３名加わったということです。これはアメリカのウィスコンシン州で行われている“ジョブプレイスメントスペシャリスト”に近いんじゃないかなと思われます。また就労移行支援事業所に支援センターから行って、協力して就労に取り組んでいるというお話もありました。

就労についてのいろんな取り組みや、こうすればいいんですよということを一緒に学んだのが別府フォーラムだったのかなと思います。

三城　古賀さんには大分フォーラムで当事者の方の代弁者として、当事者の方が今何を求めているのかというお話をしていただきました。今日は、大分フォーラムの前後で当事者の人たちがどう変わっていったのか、お話をいただきたいと思います。

変わり始めた当事者･家族

古賀朋和（大分丘の上病院デイケア・精神保健福祉士）としてデイケアを担当しています。大分フォーラムに参加して、様々な考え方があっていろんな方々がいて、支え合っていければ成長していけるのかなと感じました。利用者（当事者）の方だけの変化では限界があります。家族や地域がともに変わっていかなければならないというお話を聞いて、改めて今後の取り組み方を考えることができました。大分フォーラムに利用者さんが１５人位参加していました。今日のシンポジウムで報告するために、この前、話を聞かせてもらいました。その一人は親御さんと参加していたのですが、それまでは本人の思いが両親に伝わらなかったのですが、大分フォーラムで当事者の話や現状の報告を聞いて、第３者の客観的な情報が入ったことで、それをきっかけにして両親とスムーズに話ができるようになったとおっしゃってました。もう一つ、今まで就職して、病気が発病して、何度も何度も仕事に失敗してしまって、そのなかで病気を持ちつつも仕事ができているとか、自分ができることを一生懸命やっているという姿を大分フォーラムで見ることができて、自分だけじゃな

いんだという安心感などを得ることができた。それでこの5ヶ月間で、少しづつハローワークにも行けるようになったし、デイケアのプログラムの心理教室の中でも自分の「めんどくさい」という気持ちとか、人に出したくない気持ちを他のメンバーの前で言えるようになってきた。それはデイケアという場所が自分にとって安心できる場所に変わっていったということで、大分フォーラムに参加して変わっていったのかなと感じています。またフォーラムに参加した会社経営者との出会いがありまして、これから利用者さんが働けるように話し合いもしていきましょうということにしています。

これまで、病気を伝えずにメンバーさんが就職したんですが、病気を伝えてないと不安だとか「ばれるんじゃないか」ということで不安になって、大体１か月から半年間位で辞めていたんですけど、最近、病気をオープンにして働ける場をハローワークの協力も得て、オープンにすると２年だとか就労期間が長くなってきていると感じています。病気を抱えていても、それを受け入れる地域であってほしいなと思っています。これからも横のつながりを広げていければと考えています。

地域に応じて動きを作れる!

三城　次に竹田のフォーラムの報告をしていただこうと思っています。竹田の実行委員会には私もずいぶん通いました。今日は一緒に取り組んでくださった吉弘実行委員長や福祉事務所の佐田所長や渡部保健師さんたちも来ていただいていますが、社会資源がすごく少ないなかでどう組み合わせて活動していけばいいのか、私自身不安を抱えながら竹田に通いました。

通っていくなかで、資源が少ないなかでいろんな連携を持とうとしていることが伝わってきて、地域の状況に応じて新しい動きを作れるんだということが実行委員の確信になってきました。そして、佐田所長さんが「これは１回で終わらせない。またやりましょう」と言ってくださって、私はすごくうれしい思いをしています。

では、竹田フォーラムの報告をやまなみ会の立川さんにお願いします。

地域の偏見が根強いなかで

―竹田フォーラム

立川房江（やまなみ福祉会）まず、「どうして竹田でフォーラムか？」というところからお話しさせていただきます。

竹田市と豊後大野市で豊肥地区といいますが、旧三重町にはやすらぎ作業所があり、竹田にはやまなみ作業所があり、２０年以上前から家族会の方々の活発な活動が行われてきました。それに加えて“職親”として土居燃料が長い間、精神障がい者の働く場として間口を開いています。そして三重町でもボランティアの方がたくさんいますが、竹田でも“ほほえみの会”で精神保健福祉ボランティアが養成されていまして、やまなみの行事にも毎年力を貸してくださっています。

そんな積み上げの上に、第１回の準備会が昨年１０月１７日に行われました。まず地域の現状についていろんな話が出ました。私たちの地域は、高齢化や過疎化が大変進んでいます。高齢者の精神障がい者への偏見が根強いなかで若い人の理解も進んでいない現実があります。私が勤めている精神障がい者の通所授産施設やまなみは精神障がいのある人が通って来て働く場です。通ってこられる利用者の方は地元の人と「おはようございます」とかあいさつして、「頑張るなあ」とかあったかい声をかけてもらえるんですが、よそから聞く声は「やまなみに行きよるんかえ」とか、「あんなとこに行きよるんかえ」とか言われます。私も「あんたどこに勤めちょるの」といわれて「やまなみです」というと言うと、「ああそう」という感じです。ただ、利用者のほとんどの方が堂々と「自分は精神障がい者でやまなみに行っています」ということを言える方が来てくださっています。

そんななかで、地域の方がやっぱり精神障がいということになると理解がないというのが現実です。同時に、精神障がいがある方同士で偏

見というか「あの人ほどじゃない」みたいな意識があったり、精神病ということを受け入れたあとでも、それが障がいだと思うまでの期間が多くかかったりします。精神病にかかって何年も経って、「障害年金を受けたら」と話すと、「障がい者なんて言わないで」と言う。「障がい者」に対する自分自身の偏見もあるのです。それを受け入れるのが難しい。そういう偏見が厚い壁として、特に豊肥地区にあるのかなということを感じています。そういうなかで孤立して「自殺したい」という気持ちになる人がでたり、家族から協力してもらえなかったりという現実がある地域だと感じています。

人口が少ない地域で、まわりの人たちの関与も少ない。では障がいのある人たちが出て行く場が地域にあるのか、受け入れる形が地域に作られているのかというと、それも少ない。私たちも必要性を感じているのですが、日々の対応に追われて十分取り組めないのが現実です。大学の先生の話では、豊肥地区のような広い地域に病院が一つしかないというのは全国的に見てもめずらしいということです。それに加えて授産施設が竹田に一つ、三重町と合わせても二つと、社会資源が少ないのも極めてめずらしいそうです。

もっと作業内容を豊富にするために他の施設と協力したり、よその地域ではいくつもの施設がネットで協力していろいろ生み出すことができるんですが、この地域ではそれもできない現状です。みんな頑張っているんだけど、ではどうすればいいんだろう。それを一緒に考えようというのがフォーラムに参加した私たちの思いでした。

行政の積極参加が大きな力に

立川　実際にフォーラムが行われたのは今年の２月２４日です。福祉行事では参加は福祉関係者の方がほとんどですが、このフォーラムでは福祉事務所のご尽力があり、ほとんど初めてではないかという方、民生委員、児童委員の方、自治会の方々の参加もありました。地域の報告

二月に行われた竹田フォーラム

として、やまなみや加藤病院、竹田ほほえみ会が行い、当事者の報告も行われました。

参加者の感想としては、「自分たちが知らないことが大変多かった」、「当事者·家族、行政の方もこれだけ関係する人が多いんだなということを知って、それが力になる」、「日々、目の前のことで終わってしまうんですが、関係者の方やたくさんの方が集まると、もう少し上が見えるんじゃないかなと、そういう道が開かれるような思いがした」という意見が多く聞かれました。

ぜひこの熱の冷めないうちに、次の機会を持って次の段階に進めていけますように、それは私たち関係者と当事者の力になるんじゃないかなと思っています。地域力の低いところに行政の方が積極的に関わってくださったことが何にも増して力になってよかったなというのが感想です。

いろんな地域にいろんな取り組み

三城　３地区の報告をしていただきました。各地区とも非常に特徴が出ていたと思います。立川さんからお話をいただいた竹田地区は、私も確かに社会資源は少ないと思っていました。でもフォーラムに関わってみて、社会資源は数じゃないなと思いました。というのは、竹田市の行政がフォーラムを通じて非常に積極的に「この地区をどうやってつくっていくのか」ということに取り組んでこられたということと、もう一つが竹田ほほえみ会が、ボランティア団体なんですけど、行政と協力して地区の当事者の人

たちを支えているという基盤がつくられていました。それにネットに参加していただいている土居燃料という職親さんがいて、川口さん、立川さんたちのやまなみ会があって、それに医療も連携してきている。竹田にある社会資源が結びついていこうとしている。お互いの理解と協力を深めることに、フォーラムの効果もあったように感じています。

別府市については、これが終わったあと別府市商工会青年部の方たちに呼ばれてお話しさせていただいて、その後の懇親会の中で「精神障がい者の雇用をやってみようか」という話になりました。いろんな具体的な動きが出てきています。

大分市には先進的な取り組みがあります。医療機関や事業所が多く、当事者の生活に関わっているところが多い。フライハイムは地域の人たちの理解をどう進めるかという取り組みをされ、L.L.C.ハートブリッジは介護という分野で、仕事を広げ、雇用形態を作り出していく取り組みをやっています。また神田さんのぶらぼぉファームや首藤エコ農園は農業分野に活動を広げています。

また、先日は宇佐に行ったんですが、宇佐市では行政が積極的に関わって共同受注のセンターが作られ、仕事の確保が困難な小さな作業所等の受注をまとめて行い、安定した仕事の確保と賃金のアップをめざしています。収入や生きがいなど就労の多様な意義をとらえ直し、いろんな可能性を模索する取り組みが進み始めていると実感しています。

いろんな地域にいろんな取り組みがある、そのことがとても大切なことだと思います。

壁は一つずつ解決していける

三城　ただ、動けば動くほどいろんな壁にぶつかります。その時に必要なのは、いろんな立場の人たちの連携です。いろんな業種やいろんな関係者が集まり、みんなで話しあい、協力できるかたちを作ることによって、一つずつ解決していけるというのが、この３年間のネットワークの経験の実感です。

それぞれの地域に、顔が見えるネットワークが存在していることが非常に重要で、それを皆さんと一緒につくっていくことができればと願っています。

（シンポジウムの内容を紙面の範囲内で事務局の責任で要約させていただきました。）

第４回総会の報告

●新年度方針

新年度の方針として、①就労を支える取り組み②地域にネットワークを広げる③広報活動の充実一を決定しました。実際に雇用した場合の「対応マニュアル」の作成、農業の可能性調査などを計画しています。

●新役員

第４回総会では役員の改選も行いました。藤波代表、神田副代表、三城副代表、安部事務局長らを再任し、新たに副代表に森崎大輔さん、事務局次長に白石一徳さん、その他の新役員を選出しました。

●会計報告

昨年度の主な収入は会費 103000円、主な支出は郵送料 71095円、プロバイダー料 27930円などでした。新年度も会費中心の運営になります。できる限り支出を抑えますが、会費未納の方はぜひ納入をお願いします。ご寄付も大歓迎です。

編集後記　地域の実行委員会に参加すると目を開かされることが必ずあります。もともと地域にはネットワークがあるのです。苦しんでいる人たちを何とかしたいと、身を粉にして頑張っている人がいて、その人たちを支える人がいます。私たちにできることは、そのネットワークを地域に見えるものにすること、ネットとネットをつなぐこと、そして経験を伝え合うこと。誰もが安心して暮らせる地域をつくるために。(O)